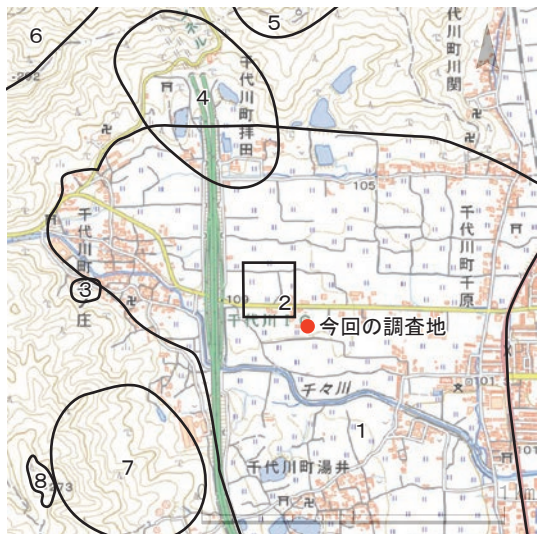




第1図 調査地位置図 (1/25,000)

1. 千代川遺跡
2. 桑寺廃寺
3. 矢ノ尾谷遺跡
4. 栢田古墳群
5. 大法寺古墳群
6. 八木城跡
7. 北ノ庄古墳群
8. 北ノ庄城跡

もっかんぼ
木棺墓群が見つかりました。居住域では、磨製石器の未成品や、河内から持ち込まれたと考えられる土器、近江系の土器、ヒスイ製の勾玉などが出土しました。このことから、千代川遺跡が石器の製作を行っていたことや、他地域との交流があった様子が明らかになりつつあります。

N2区の調査

調査区南西部では、6基以上の竪穴建物群（居住域B）、中央から東部にかけて造られた29基の木棺墓群（墓域A）、独立棟持柱建物1棟が見つかりました。弥生時代後期と考えられる竪穴建物SH03は直径約7mの円形の建物です。南西方向に長さ約11mの排水溝が掘られています。建物からは近江系の土器の破片が出土し、別の建物からは有孔磨製石鏃が出土しています。墓域Aとした木棺墓群では、29基のお墓が造られ、その大きさから長軸2mを超える木棺墓と1m前後の木棺墓に大別できます。出土遺物から中期後葉のものと考えられます。

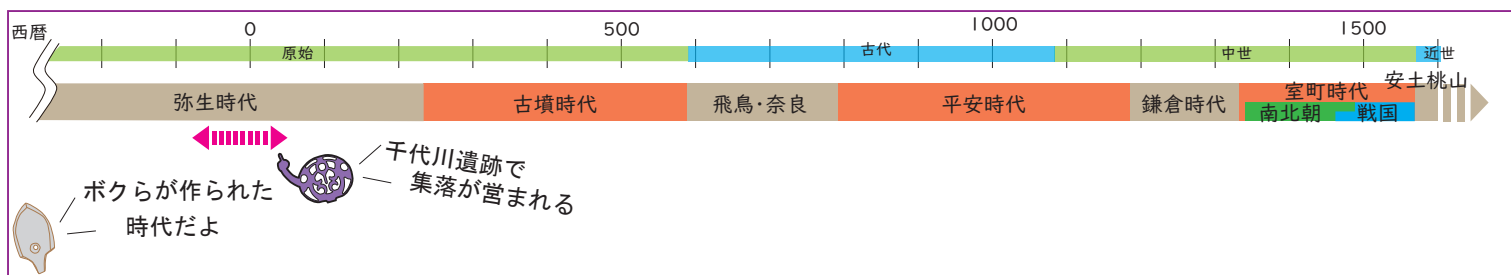
また北西部で見つかった梁行3間・桁行2間の独立棟持柱建物は、調査区内の微高地に造られており、倉庫などとして使用された可能性があります。



竪穴建物SH03全景（南西から）



木棺墓SX31全景（南東から）

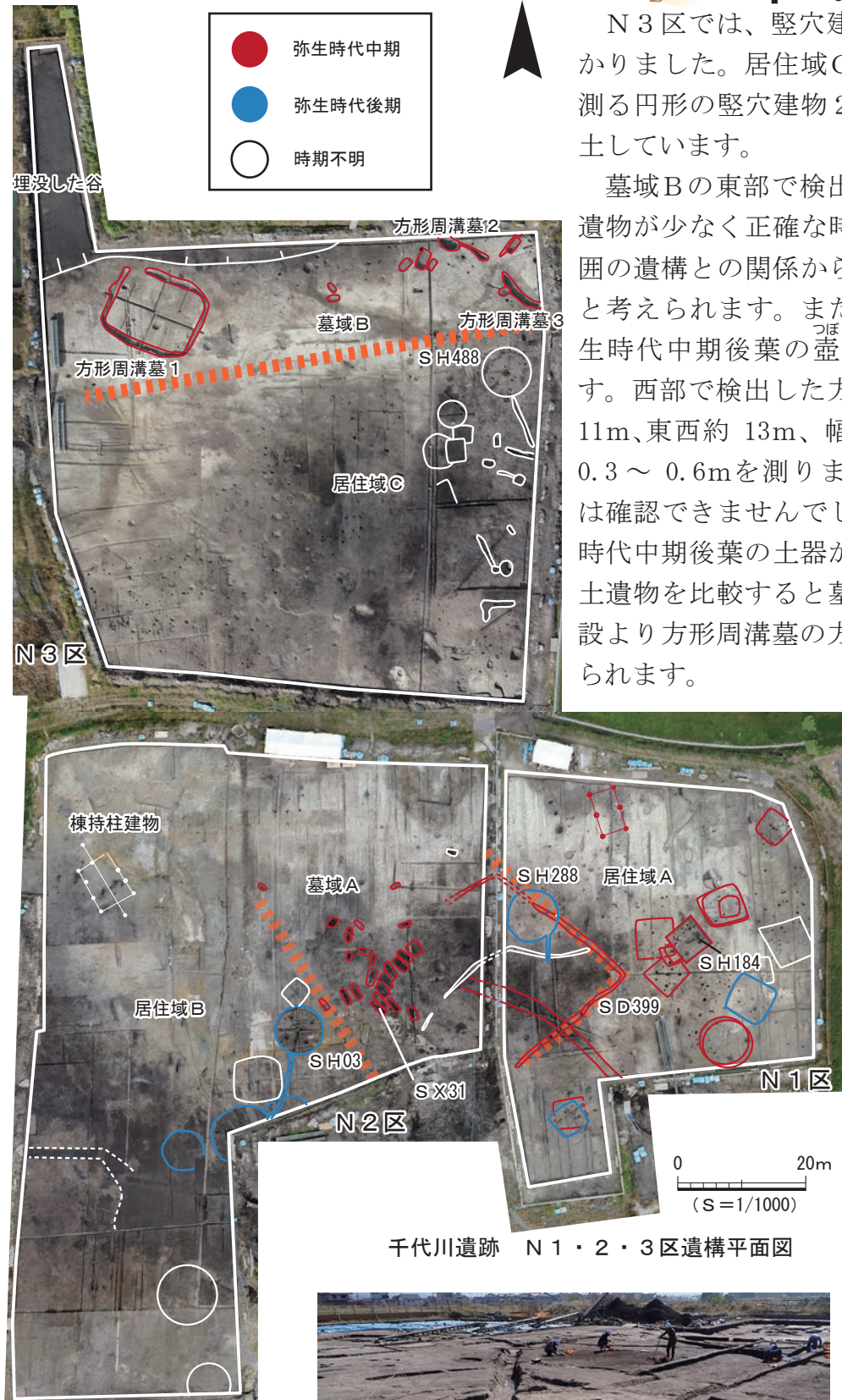


はじめに

今回の発掘調査は、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」の実施に先立って行ったものです。千代川遺跡は東西1.4km、南北1.9kmの広大な遺跡で、これまでに37回に及ぶ調査が行われ、縄文時代から中世に至る多数の遺構と遺物が見つかりました。

今年度調査したN1・2・3区では、弥生時代中期の方形周溝墓を含む墓域を2か所、竪穴建物からなる居住域を3か所確認しました。

今回、広大な範囲で調査を行ったことで多くの遺構が見つかりました。墓域では、



千代川遺跡 N1・2・3区遺構平面図



竪穴建物SH288全景（北西から）

N3区の調査

N3区では、竪穴建物群からなる居住域C、方形周溝墓を含む墓域Bが見つかりました。居住域Cでは、一辺3mを測る方形の竪穴建物3基と直径5mを測る円形の竪穴建物2基が見つかり、周辺からは石製品やヒスイ製の勾玉が出土しています。

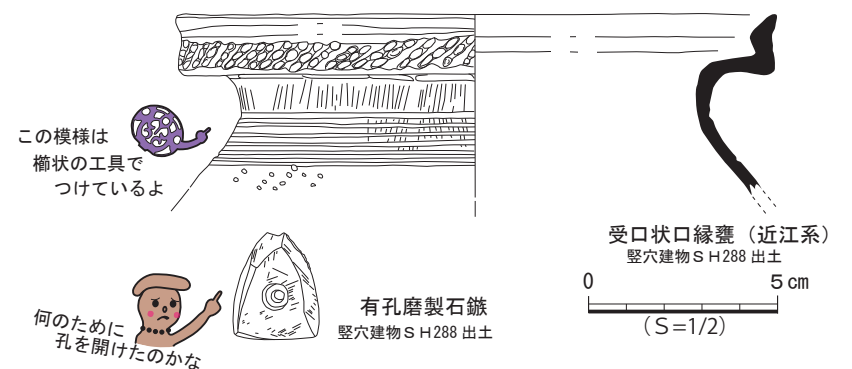
墓域Bの東部で検出した木棺墓は、出土遺物が少なく正確な時期は不明ですが、周囲の遺構との関係から、弥生時代中期ごろと考えられます。また土坑・溝からは、弥生時代中期後葉の壺や甕が出土しています。西部で検出した方形周溝墓は、南北約11m、東西約13m、幅0.5～0.9m、深さ0.3～0.6mを測ります。盛土や埋葬施設は確認できませんでした。溝からは、弥生時代中期後葉の土器が出土しています。出土遺物を比較すると墓域Bの東側の埋葬施設より方形周溝墓の方がやや新しいと考えられます。



方形周溝墓全景（北から）

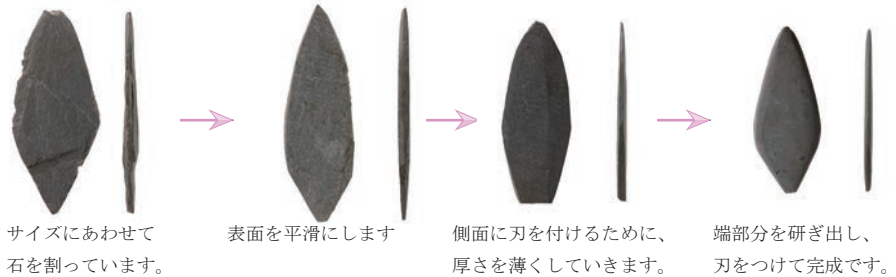
N1区の調査

N1区は台地の南端に位置しており、弥生時代中期後葉と後期の竪穴建物が15基見つかりました（居住域A）。竪穴建物SH184は中期後葉の建物で、良好な状態で残っており、中央土坑の周りに土を盛る様子や、建物の周囲に板材を差し込んだ痕跡など、建物の構造がよく分かります。竪穴建物SH288は後期の建物で、受口状口縁甕や有孔磨製石鏃が出土しています。これらは近江地域を中心に多く出土する遺物で、近江地域との関係を示唆しているのではないのでしょうか。溝SD399は幅0.4m、深さ0.6mを測り、「コ」の字状にめぐります。竪穴建物SH288以前に掘られていることがわかりました。掘削された時期は、出土遺物などから中期後葉とみられ、時期を同じくする墓域Aと居住域Aを区画する溝と考えられます。



石を割る・磨く

磨製石鏃 石鏃の製作過程がよくわかる資料が多く出土しました。



磨製石剣

石剣の破片が4点出土しました。

写真のものは、一度折れてしまった石剣の先端を細く研ぎなおし、もう一度石剣として作り直しています。

砥石

砥石とみられる石材が、N1区のSH288・N3区のSH488で出土しました。

いしぼうちょう

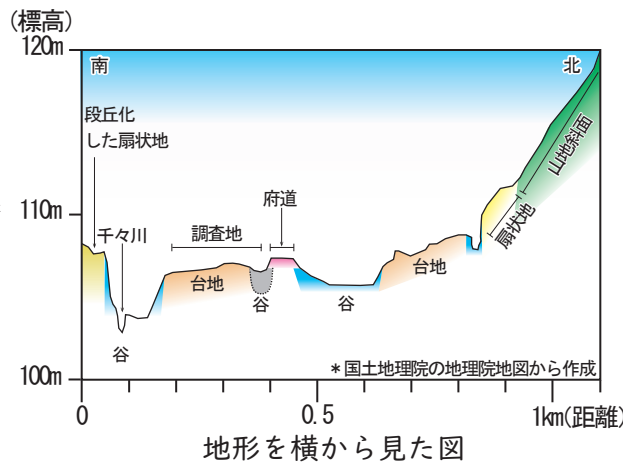
石庖丁 未成品とみられる薄い石材や破片が多く出土しました。



地形のはなし

見つかった建物やお墓は、南を流れる千々川よりもおよそ4m高い台地の上にあります。また遺跡付近で千々川の谷が狭く深くなっています。台地の北側には、台地と台地の間にできた谷底低地が広がっています。今回見つかった遺跡は千々川の洪水を受けにくい、台地の上に営まれていました。また調査地の北端には、谷が埋没していることがわかりました。

この千代川遺跡の周辺では、住まいに適した小高い台地がちょうどよい広さで広がり、そのすぐ近くに水田づくりに適した低地があると考えられ、暮らしやすい地形条件がそろっています。現在の風景も、弥生の人々が暮らしていた当時の景観と大きくは変わっていないと考えられます。千代川遺跡は、弥生時代の人々が生活を営むのに適した環境の中にあつたといえるでしょう。



まとめ

今回の調査では、千代川遺跡で初めて弥生時代中期後葉から後期にかけての居住域と墓域を同時に確認しました。弥生時代中期の集落としては、亀岡盆地で最も規模の大きなもののひとつです。注目できる成果は次の通りです。ひとつは、磨製石器が多く出土していることです。出土する石器は未成品が多く、完成品が少ないという特徴があります。これは、製作途中や失敗した石器が遺跡内に残され、完成した石器は、他地域へ搬出された可能性を示しています。また、石剣や石鏃などの武器が多く出土し、石庖丁や石斧などの農工具が少ない点は注目されます。

次に注目されることは、居住域に隣接して、木棺墓が密集していることです。弥生時代中期の一般的な墓制はN3区の北側でみられるような方形周溝墓が中心です。今回、千代川遺跡では、多くの木棺墓が見つかりました。お墓の違いにはどんな意味があるのかは今後の検討課題ではありますが、居住域との関係も含めて、当時の集落のあり方を考える上で貴重な調査成果となりました。



公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

ホームページ



X
(旧Twitter)



Facebook



京埋セ現地説明会資料 25—5

令和7年11月22日(土)

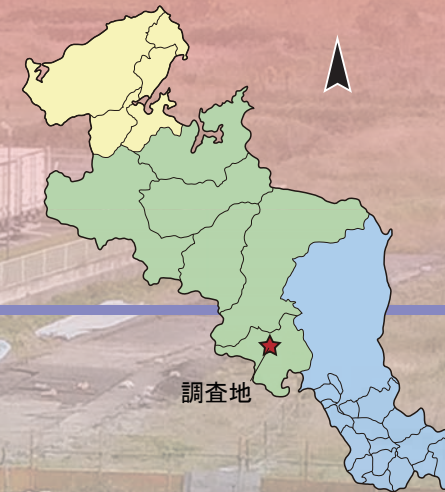
ちよかわいせき

千代川遺跡 第38次調査 N地区

調査場所 亀岡市千代川町北ノ庄

調査期間 令和7年5月8日～令和8年2月中旬(予定)

調査機関 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター



千代川遺跡N1・2区 竪穴建物群及び木棺墓群全景(南西から)